

2. 特定機能病院におけるMSWと看護職の連携に関する意識調査

看護学専攻 岡田 純也

<目 的>

近年、患者が自立した生活を送るために、医療・保健・福祉のそれぞれのサービスが十分な連携の下に、総合的に提供されることが重要となってきた。しかし、実際には医療機関における職種間連携の不十分さを指摘する報告もあり、患者が生活する上で、大きな支障となっている。患者が安心して入院生活をする上で援助する職種として医療ソーシャルワーカー（以下、MSWと略）や看護職等が存在する。特に、MSWは、国立大学医学部附属病院長会議において、患者の自立支援機能の充実に向けて配置していく報告がなされており、さらに看護職との連携が重要となってくる。そこで、今回、特定機能病院におけるMSWと看護職の連携の実態、課題を明らかにするために調査を行った。

<研究方法>

対 象：社団法人日本医療社会事業協会会員名簿より抽出した特定機能病院39施設に勤務するMSW94名（以下、A群）およびA群が勤務している特定機能病院39施設の看護部長39名（以下、B群）

調査期間：平成15年7月上旬～9月下旬

調査方法：郵送による無記名質問紙調査

調査内容：基本的属性、依頼内訳、連携状況、求める能力、役割機能、連携のあり方等。

<結 果>

A群の所持資格数は1つが22名（44.9%）、資格内容は社会福祉士42名（48.3%）が最も多かった。A群が勤務する部署での他職種のスタッフはいる（55.1%）、その内訳は看護師（28.1%）が最も多かった。A群への依頼の内訳は診療科では内科（63.3%）、依頼者では医師（83.7%）、依頼内容では退院援助に関すること（61.2%）が最も多かった。他職種との連携状況はA群、B群とも「どちらともいえない」の回答が多かった。看護職との連携状況においてA群は「どちらともいえない」の回答が多かったのに対し、B群ではMSWとの連携状況は「うまくいっている」との回答が多かった。他職種間の連携相手として最も必要と考える相手はA群、B群とも医師であった。お互いの研修会・勉強会への参加状況は、A群、B群とも「不参加」の回答が多かった。役割分担の必要性はA群、B群とも「必要」との回答が多かった。

A群が勤務する部署での看護職の配属状況は、「配属あり」、「配属なし」（50.0%）、今後の配属については「予定なし」（44.4%）、MSWと同じ部署での勤務の必要性は「必要」（61.1%）と回答していた。A群への依頼方法は「電話・FAX」（50.0%）、依頼内容項目は「経済的問題の解決、調整援助」（55.6%）が最も多かった。A群に求める能力は「地域との連携能力」（61.1%）が最も多かった。今後の連携の在り方ではA群は「連携の充実」、「質の向上」（38.8%）が最も多く、B群では「連携して退院後のフォローアップ」（38.9%）が最も多かった。現在、質問紙調査の結果を単純集計している段階であり、今後、その結果を基に分析していく予定。

<意 義>

今回の調査は、特定機能病院におけるMSWと看護職の連携の認識と専門性の確立および連携の状況を把握することで課題が明らかにできると考える。